

※このからは『Z Study 解答用紙編』の国語「評論用語／助動詞／比較選択」2枚目にご記入ください。

二

三

問一 次の(1)～(5)の文の傍線部を口語訳せよ(ただし、(5)の「江帥の一言」は訳さずそのままでよい)。(14点)

- (1) 「いづ方へいにけむ」と悲しう思ひけり。 『大和物語』
- (2) にぎはひ豊かなれば、人には頼まるるぞかし。 『徒然草』
- (3) 「月の都の人まうで来ば、(私は)捕らへさせむ」と申す。 『竹取物語』
- (4) この宿りたる僧、あやしと聞くほどに、このほこらの内より「侍り」と答ふなり。 『宇治拾遺物語』
- (5) 「*江帥の一言なからましかば、危なからまし」とぞいはれける。 『古今著聞集』

注 *江帥おびのよみ大江匡房を指す。

問二 次の(1)～(3)の文の□に最適な助動詞を、それぞれ「 」の語群の中から選び、適切な形に直して記せ(同一語の反復使用不可)。(各2点)

- (1) 「その人ならば苦しかる□。入れ申せ」とて、門を開けて対面あり。 『平家物語』
 - (2) 時の間の煙ともなりなむとぞ、うち見るより思は□。 『徒然草』
 - (3) 都の中に多き人、死なぬ日はある□す。 『徒然草』
- 語群 「る・べし・めり・らむ・まじ」

【二】 次の文章を読み、あとの問に答えよ。

昔、^{*}大安寺に、^{*}栄好といふ僧ありけり。身は貧しくて、老いたる母を持ちたりければ、^{*}外にて飯をして、先づ母に与へて、まゐる由を聞きて後、みづからは食ふ習ひにて、年ごろの次第を違へず。此の栄好が房の傍に、垣を一つ隔てて、勤操といふ人すみけり。或る時、栄好が小童、しのびつつ泣く声あり。勤操あやしく思ひて、童を呼びて、「何事によりて泣くぞ」と問ふ。答へて言ふやう、「我が師、今朝にはかに命終り給ひぬれば、母の尼上、いかにして命つぎ給はずらんと悲しく侍るなり」と言ふ。勤操これを聞きて、慰めて言ふやう、「母をば、我、亡者にかはりて我が分をわけて養はん」と言ふ。小童これ聞きて、かなしみの中に^{*}限りなく覚えて、涙を拭ひつつ、⁽¹⁾さりげなき様にもてなせり。母の尼公、我が子の失せたることも知らずして月日を送る程に、勤操がもとに客人来て、酒など飲む事ありけり。何となくまぎれて、⁽²⁾飯送る時過ぎにけれど、童言ひ出ださず。やや久しくありて後送りたるに、母の尼公言ふやう、「など例よりはおそかりつるぞ」と言ふを聞きて、事のありさまはじめより語る。「やがても申すべかりしかども、年たけたる御身には、『もし嘆きに堪へず、⁽³⁾ひきいり給ふ事もぞ侍る』とて、今まで申さざりつるなり。此の召し物をば、^{*}子御坊の同法のおはするが、失せ給ひにし日より、我が分をわかち奉らるるなり。今日、客人の来たりて、酒など参りつる程に、心ならず日たけて侍るなり。されど、御子ならばこそは、^{*}「いかにも」ともすすめん。さすがに^{ははか}憚り思ひ給へて」など言ひやらず泣く。母、聞くままに倒れ伏して、「今日の食ひ物のおそかりつるを、⁽⁴⁾あやしめざらましかば、我が子のありなしも知らざらまし」と言ひて、^{たちま}忽ちに絶え入りぬ。

『発心集』巻五 十四「勤操、栄好を憐れむ事」

注

- * 大安寺 〓 南都七大寺の一つ。
- * 外にて飯をして 〓 僧房の外で食事をつくつて。七大寺では僧房内で食事は作らないならわしだった。
- * 限りなく覚えて 〓 この上なく嬉しく思つて。
- * ひきいり 〓 ここでは、亡くなる意。
- * 子御坊の同法 〓 栄好の修行仲間。
- * いかにも 〓 たいへん(遅い)。

問一 傍線(1)について、次の(i)(ii)に答えよ。

(i) 主語は誰か、文中から抜き出して記せ。(2点)

(ii) 何のためにこのように行動したのか、具体的に説明せよ。(8点)

問二 傍線(2)とあるが、童は勤操に対して、尼公に食事を届ける時刻が過ぎてしまったことをなぜ言わなかったのか、説明せよ。(8点)

問三 傍線(3)(4)を口語訳せよ。(12点)

問題

二

三

問一 次の(1)～(5)の文の傍線部を口語訳せよ(ただし、(5)の「江帥の一言」は訳さずそのままでよい)。(14点)

- (1) 「いづ方へいにけむ」と悲しう思ひけり。 『大和物語』
- (2) にぎはひ豊かなれば、人には頼まるるぞかし。 『徒然草』
- (3) 「月の都の人まうで来ば、(私は) 捕らへさせむ」と申す。 『竹取物語』
- (4) この宿りたる僧、あやしと聞くほどに、このほこらの内より「侍り」と答ふなり。 『宇治拾遺物語』
- (5) 「*江帥の一言なからましかば、危なからまし」とぞいはれける。 『古今著聞集』

注 *江帥おおそのまふみ大江匡房を指す。

問二 次の(1)～(3)の文の□に最適な助動詞を、それぞれ「」の語群の中から選び、適切な形に直して記せ(同一語の反復使用不可)。(各2点)

- (1) 「その人ならば苦しかる□。入れ申せ」とて、門を開けて対面あり。 『平家物語』
 - (2) 時の間の煙ともなりなむとぞ、うち見るより思は□。 『徒然草』
 - (3) 都の中に多き人、死なぬ日はある□ず。 『徒然草』
- 語群 「る・べし・めり・らむ・まし」

二 次の文章を読み、あとの問に答えよ。

昔、^{*}大安寺に、^{*}栄好といふ僧ありけり。身は貧しくて、老いたる母を持ちたりければ、^{*}外にて飯をして、先づ母に与へて、まゐる由を聞きて後、みづからは食ふ習ひにて、年ごろの次第を違へず。此の栄好が房の傍に、垣を一つ隔てて、勤操といふ人すみけり。或る時、栄好が小童、しのびつつ泣く声あり。勤操あやしく思ひて、童を呼びて、「何事によりて泣くぞ」と問ふ。答へて言ふやう、「我が師、今朝にはかに命終り給ひぬれば、母の尼上、いかにして命つぎ給はんずらんと悲しく侍るなり」と言ふ。勤操これを聞きて、慰めて言ふやう、「母をば、我、亡者にかはりて我が分をわけて養はん」と言ふ。小童これ聞きて、かなしみの中に、^{*}限りなく覚えて、涙を拭ひつつ、⁽¹⁾「さりげなき様にもてなせり。母の尼公、我が子の失せたるとも知らずして月日を送る程に、勤操がもとに客人来て、酒など飲む事ありけり。何となくまぎれて、⁽²⁾飯送る時過ぎにけれど、童言ひ出ださず。やや久しくありて後送りたるに、母の尼公言ふやう、「など例よりはおそかりつるぞ」と言ふを聞きて、事のありさまはじめより語る。「やがても申すべかりしかども、年たけたる御身には、『もし嘆きに堪へず、⁽³⁾ひきいり給ふ事もぞ侍る』とて、今まで申さざりつるなり。此の召し物をば、^{*}子御坊の同法のおはするが、失せ給ひにし日より、我が分をわかち奉らるるなり。今日、客人の来たりて、酒など参りつる程に、心ならず日たけて侍るなり。されど、御子ならばこそは、『^{*}いかにも』とますすめん。さすがに憚り思ひ給へて」など言ひやらず泣く。母、聞くままに倒れ伏して、「今日の食ひ物のおそかりつるを、⁽⁴⁾あやしめざらましかば、我が子のありなしも知らざらまし」と言ひて、⁽⁴⁾忽ちに絶え入りぬ。

『発心集』巻五 十四「勤操、栄好を憐れむ事」

注

- * 大安寺 〓 南都七大寺の一つ。
- * 外にて飯をして 〓 僧房の外で食事をつくつて。七大寺では僧房内で事は作らないならわしだった。
- * 限りなく覚えて 〓 この上なく嬉しく思つて。
- * ひきいり 〓 ここでは、亡くなる意。
- * 子御坊の同法 〓 栄好の修行仲間。
- * いかにも 〓 たいへん(遅い)。

問一

- 傍線(1)について、次の(i)(ii)に答えよ。(2点)
- (i) 主語は誰か、文中から抜き出して記せ。

- (ii) 何のためにこのように行動したのか、具体的に説明せよ。(8点)

問二

傍線(2)とあるが、童は勤操に対して、尼公に食事を届ける時刻が過ぎてしまったことをなぜ言わなかったのか、説明せよ。(8点)

問三

傍線(3)(4)を口語訳せよ。(12点)

二

解答

問一 (1) どこへ行ったのだろうか

(2) 頼りにされるのだ

(3) 捕まえさせるつもりだ

(4) 返事をするようだ

(5) 江帥の一言がなかったならば、危なかっただろうに

問二 (1) まじ (2) るる (3) べから

解説

問一 (1)「いづ方」は場所を問う疑問語であり、「いにけむ」は、ナ行変格活用動詞「いぬ」の連用形に過去推量の助動詞「けむ」がついたもの。したがって、傍線部は〈どこへ行ったのだろうか〉と訳される。
(2)助動詞「る」の意味のとりえ方を確認しよう。

助動詞「る」の意味のとりえ方

上に「人物十に」がある	↓	受身が多い
身分の高い人が主語である	↓	尊敬が多い
下に打消の助動詞を伴う	↓	可能が多い
心情を表す動詞についている	↓	自発が多い

傍線部のすぐ上に「人に」とあるので、これは受身のパターンと合致している。実際、「にぎはひ豊かな」人物が「人(「他の人々」)から「頼まるる(「頼りにされる」)」という文脈は、きわめて自然である。

(3)直後に体言もなく、遠まわしに話すような場面でもないので、「捕らへさせむ」が婉曲でないことは明らかである。では、推量と意志のうちどちらであろうか。それを判定するには、主語を手がかりにしなければならぬ。この設問では主語が「私」であることが明記されているので、「む」は意志を表していると考えられる。「させ」は使役と尊敬の意があるが、ここは、家来などに捕まえさせるという使役の意。

(4)「答ふなり」はハ行下二段活用の動詞である。この動詞が「答ふ」という形になるのは終止形の時だけであるから(連体形は「答ふる」)、下につく助動詞「なり」は、終止形(ラ変型には連体形)接続の伝聞・推定の「なり」だと判定できる。ここでは、「ほこらの内より」声が聞こえてくるという文脈になっているので、推定(「……のように聞こえる……」)の意で訳せばよい。

(5)「――ましかば……まし」は反実仮想の構文。条件部分と結果部分に使われている語は、「なし」と「危なし」である。よって、「なからましかば、危なからまし」の部分、〈なかつたならば、危なかつただろうに〉の意となる。

問二 (1)「門を開けて対面あり」とあることから、この文が表しているのは、訪問客を邸内に招き入れる場面だと考えられる。もし仮に「その人」すなわち訪問客が「苦し(「招き入れるのが不都合である」)」と言われるような相手であったならば、対面が実現するはずがない。したがって、空欄には「苦し」を打ち消すような助動詞を入れる必要がある。語群の中では「まじ」のみが打消の意味を含んでいる。係り結びを導くような語は使われていないので、終止形をそのままあてはめればよい。

(2)空欄のすぐ上にあるのは「思ふ」の未然形「思は」である。語群のうち未然形接続をするのは「る」のみであるから、これを選べばよいわけだが、ここで気をつけなければならないのは、空欄が係助詞「なりなむとぞ」の結びであるということ。係り結びの法則に従い、連体形「るる」を入れる必要がある。そうすれば、空欄がある部分は「自然に思われる」という自発表現になる。

(3)空欄は打消の助動詞「ず」の上にある。よって、ここには未然形の活用語が入るはず。語群のうち「めり」と「らむ」には未然形が存在しないので、これらは除外される。また、「る」は「あり」の連体形「ある」ではなく未然形「あら」の下につくはずであるから、これもまた不適切である。よって、残ったのは「べし」と「まじ」。あとは文脈から判断すればよい。「まじ」を選ぶと、「まじからず」となり、「人が死なない日があるはずがないことはない」という奇妙な表現になってしまう。ゆえに、「べし」の未然形「べから」が正解となる。この部分の正しい解釈は「あるはずはない」。

語訳

問一 (1) 「どこへ行ったのだろうか」と悲しく思った。

(2) 裕福であるから、他人に頼りにされるのだ。

(3) 「月の都の人が参上したら、(私は) 捕まえさせるつもりだ」と申し上げる。

(4) この泊まっていた僧が、不審に思っただけで聞いてみると、このほらの中から「おります」と返事をするようだ。

(5) 「江帥の忠告が(記憶に残っていない) なかったならば、危なかっただろう」と言われた。

問二 (1) 「その人ならば不都合であるはずがない。お入れ申し上げよ」と言っ

て、門を開いて面会する。

(2) あつという間に(燃えて) 煙になってしまっただろうと、(屋敷を) ちよつと見るとすぐに思いやられる。

(3) 都の中にたくさんいる人々が、(誰も) 死なない日があるはずはない。

語句チェック

まうづ……①参上する・うかがう。②(神社・寺などに) 参拝する・

参詣する。

あやし……①不思議だ・神秘的だ。②異常だ・妙だ。

二

解答

問一 (i) 小童

(ii) 栄好の母に、栄好の死を知られないようにするため。

問二 勤操は尼公の子ではないため、刻限が過ぎたことを勤操に告げるのは気がひけたから。

問三 (3) お亡くなりになることがありましたら大変だ

(4) もし見とがめなかつたならば、自分の子の生死も知らなかつただろうに

解説

問一 まず傍線部を直訳しておおよその内容や方向をつかむ。「さりげなき(さりげなし)」は現代語と同様、〈なにげない様子だ〉という意味。「もてなし(もてなす)」は現代語の〈歓待する〉の意味ではなく、〈振る舞う〉の意。したがって全体では〈なにげない様子で振る舞った〉となる。これを踏まえて、(i)(ii)を考えよう。

(i)直前の「小童これを聞きて……涙を拭ひつつ」という文脈から「小童」だと判断できる。

(ii)まず、〈なにげない様子で振る舞った〉とは、「小童」の誰に対する行動かを考えてみる。直後に「母の尼公、我が子の失せたるとも知らずして……」と書かれていることから、「小童」は、栄好の母に栄好の死を知られないように行動したのだと判断できるだろう。童が栄好の死を意図的に隠していたことは、あとの「やがても申すべかりしかども……今まで申さざりつるなり」という発言からも確認できる。

問二 傍線部直前に、「勤操がもとに……何となくまぎれて」とあり、

ここから、勤操のところに来客があり、酒などを飲んでいて、栄好の母に食事を送り届ける時刻が過ぎてしまったことがわかる。童はそれに気がついたが、勤操に栄好の母に食事を送り届ける時刻が来てしまったことを知らせなかったのである。では、なぜ知らせなかったのか。その理由は、少し後の「母の尼公」との会話から読み取れる。

問題文の「こ」を見よう!!

母の尼公言ふやう、「など例よりはおそかりつるぞ」

←小童の返答

「……此の召し物をば、子御坊の同法のおはするが、(栄好が)失せ給ひにし日より、我が分をわかち奉らるるなり。……御子ならばこ

そは、「いかにも」ともすすめん。さすがに憚り思ひ給へて」

「注」にあるように、「いかにも」はここでは〈たいへん〉の意味。栄好の母に食事を送り届ける時刻が過ぎてしまった、という文脈なので、「いかにも」の後には「遅し」などの言葉が省略されていると考えてよい。勤操が尼公の子であるならば、食事を送る時刻が遅すぎると言えるが、勤操は母君の子ではないために、催促するのは気がひけると童は思ったのである。したがって、この部分をまとめればよい。なお、「思ひ給へて」の「給へ」は下二段活用の謙讓の補助動詞である。

問三 (3)「もぞ」がポイント。「ぞ侍る」は強意を表す係り結びだが、「もぞ」「も」も「ぞ」もともに係助詞)となると、将来を予想した不安や懸念の意味を表す。〈……したら大変だ〉〈……するといけない〉と訳せばよい。「ひきいり」は〈亡くなる〉の意。「給ふ」の尊敬の意と、「侍る」の丁寧の意を訳に生かすことを忘れずに。

(4) 反実仮定の構文、「――ましかば、……まし〔もし〕――なら、……だろうに」をつかむことがポイント。「あやしむ」には四段活用と下二段活用があるが、「あやしめ」は下二段活用の未然形で、〈不審に思う・見とがめる〉の意。「ありなし」は「あるかないか」ということだが、ここは「我が子」のことだから、〈生きているか死んでいるか(＝生死)〉の意味だと判断する。

口語訳

昔、大安寺に、栄好という僧がいた。貧乏で、年老いた母がいたので、(僧房の) 外で食事を作って、まず最初に母に与えて、(母が) 召し上がること聞いた後、自分は食べる習慣であって、長年の順序を変えることはない。この栄好の僧房のそばに、垣を一つ隔てて、勤操という人が住んでいた。あるとき、栄好の(召使いである) 小童が、しのびながら泣いている声がある。(その泣き声を耳にして) 勤操は不思議に思って、童を呼んで、「どういうことが原因で(おまえは) 泣くのか」と尋ねる。(童が) 答えて言うことには、「私の師(＝栄好) が、今朝急にお亡くなりになったので、母の尼君は、(今後) どのようにして生きていらっしやるのだろうと(思うと) 悲しいのです」と言う。勤操はこれ聞いて、(童を) 慰めて言うことには、「(栄好の) 母上を、私が、亡くなった人(＝栄好) に代わって私の(食事の) 分を分けて養おう」と言う。童はこれ聞いて、悲しみの中にあってもこの上なく嬉しく思って、涙をふきながら、(栄好の母に栄好の死を知られないように) なにげない様子で振る舞っていた。母の尼君は、わが子が亡くなったとも知らないで月日を過ごすうちに、(ある日) 勤操のところにお客が来て、酒などを飲むことがあった。(勤操は) 何となく気をとられて、(栄好の母に) 食事を送る刻限を過ぎてしまったが、(そのことを) 童は(勤操に) 言い出

さない。ややしばらく時間が経った後(栄好の母に食事を) 送ったところ、母の尼君が言うことには、「どうしていつもより(食事を持ってくるのが) 遅かったのか」と言うのを聞いて、(童は) 事情を最初から語る。「(栄好さまが急死したことを) すぐにも申し上げるべきでしたが、老齡の(母君の) お体には、『もし(母君が息子を失った) 悲しみに堪えられず、お亡くなりになることがありましたら大変だ』と思って、今まで申し上げなかったのです。このお食事を、栄好さまの修行仲間であらうしやる方が、(栄好さまの) お亡くなりになった日から、自分の(食事の) 分をお分け申し上げなさっているのです。今日は、お客がやってきて、酒などをお飲みになるうちに、心ならずも(母君に差し上げるお食事の) 時刻が過ぎてしまったのです。けれど、ご子息ならば、(母君にお食事を差し上げるのが) 『たいへん(刻限が過ぎていきます)』とも催促できましよう。そうはいうものや(勤操は母君の子ではないので、催促するのに) 気がひけ申し上げまして」など(最後まで) 言い尽くさず泣く。母は、(事の真相を) 聞くとすぐに倒れ伏して、「今日の食事が遅かったのを、もし見とがめなかつたなら、我が子の生死も知らなかつただろうに」と言って、そのまますぐに息が絶えてしまった。

語句チェック

- まゐる……〔謙讓語〕①参詣する。さんげい②参上する。③差し上げる。
 〔尊敬語〕①(着物を) お召しになる。②お飲みになる。
 ③召し上がる。
 失す……①なくなる。②この世からいなくなる。死ぬ。
 やがて……①そのまま。②すぐに。
 さすがに……そうはいうものの・なんととってもやはり。